昆支王と飛鳥千塚古墳群

笠 井 敏 光

はじめに

昆支王が倭国の拠点としたのが飛鳥戸郡を中心とする河内飛鳥である。昆支王を巡る２つの系譜や後世に及ぼした影響、その年代について検討する。また、飛鳥戸郡の地理的な範囲、さらにその末裔である飛鳥戸造一族と墳墓である飛鳥千塚古墳群の分析を通して、支群ごとの構成・年代・特徴を考え、被葬者の性格に迫りたい。

１．河内飛鳥と安宿郡

大阪府南部の羽曳野市・柏原市にかつて所在した旧安宿郡（飛鳥戸郡・あすかべぐん）を中心とする地域は、奈良県南部の飛鳥（明日香）に対して河内飛鳥（近つ飛鳥）と呼ばれた。河内飛鳥は、安宿郡を中心とする安宿地域（Ⅰ）、太子町・河南町にわたる磯長（しなが）地域（Ⅱ）、羽曳野市・藤井寺市に造営された古市古墳群のある古市地域（Ⅲ）、そして野中寺の南に広がる寺山地域（Ⅳ）の４地域に分けることができる。

河内飛鳥の中でもその中心は、安宿地域である。奈良時代の安宿郡には３郷があったことがわかり、上（賀美・加美）郷は羽曳野市飛鳥・駒ヶ谷、中（奈加・尾張）郷は柏原市円明・玉手・片山、下（資母）郷は柏原市国分に比定することができる。

２．昆支王と２つの系譜

昆支王が妻とともに来倭したのが４６１年、翌年に子どもが生まれたので妻子を百済に帰国させた。この子が後の武寧王である。昆支王は倭国滞在中に５人の子息をもうけ、第２子は文周王の娘との間に生まれた後の東城王である。４７５年に百済前期の都である漢城が陥落、昆支王は中期の都である熊津で即位した文周王を支え、４７７年に没した。

天皇は２００１年、６８歳の誕生日に先立ち、ワールドカップにあわせた記者会見で、次のように述べた。「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに韓国とのゆかりを感じています。」これが、「韓国とのゆかり発言」と呼ばれているもので、韓国では大きく取り上げられたが、日本ではあまり報道されなかった。歴史学では当たり前になっている歴史事実で、平安時代の記録には「百済王らは朕が外戚」と書かれ、百済王家との関係を誉れ高く記しているが、天皇自らこのことを明言されたことに大きな意味がある。

そこで、再度検討した結果、昆支王に始まる２つの系譜が明らかになった。ひとつは、昆支王の子、武寧王に始まる系譜で、武寧王の子である純陀太子を経て桓武天皇の生母である高野新笠（たかののにいがさ）に至る系譜で、このことを天皇は発言されたのである。

もうひとつは、文周王の娘との間に生まれた東城王をはじめとする飛鳥戸造一族となり、河内飛鳥に居住した。彼らは後に改姓して百済宿禰となり、藤原氏につながり、清和天皇に至る系譜をもつ。これらのことから昆支王を祭神とする飛鳥戸神社は、８６０年に官社となり、８８０年には春秋祭祀のために田一町が与えられた。

吉田晶氏による「羽曳野市周辺の氏族分布表」によると、８・９世紀の安宿郡に分布する氏族１４氏のうち、渡来系氏族が９氏、６４％を占めている。渡来系氏族が過半数以上であることは、自然的な定住の結果ではなく、王権による計画的な配置であると考えられる。

３．飛鳥千塚古墳群

飛鳥千塚古墳群は、羽曳野市飛鳥・駒ヶ谷地域の丘陵において６～７世紀に築かれた古墳群で、墳丘は１０～２０ｍ前後の円墳、主体部は横穴式石室を中心とする。

古墳群は、Ａ～Ｇの７つの支群に分けることができる。

Ａ支群は、現在の飛鳥集落内にあり、低い立地を示す。かつては１５基存在したが、分布調査時に８基、現在は３基の墳丘を確認できる。６世紀後半の横穴式石室を主体とするものと推定できる。

Ｂ支群は、飛鳥新池の西方・鉢伏山の南側、標高５０～１９０ｍに分布する。横穴式石室墳の他に、観音塚・観音塚西・観音塚上・鉢伏山南峰の横口式石槨がみられる。塚原古墳からは、金銅製のかんざしが出土している。

Ｃ支群は、寺山より南西に延びる標高１４０～２００ｍの尾根上に築かれ、オウコ古墳群と呼ばれている。かつては３４基あったが、分布調査の時に１３基確認されている。主体部の構造から、自然石を用いた無袖の横穴式石室墳と、横口式石槨が併存している。

Ｄ支群は、寺山より分岐した標高９０～１３０ｍの尾根上に位置し、約１０基の無袖横穴式石室墳が確認されている。

Ｅ支群は、鉢伏山から南西の尾根上に存在する約１２基の横穴式石室墳で、駒ヶ谷古墳群と呼ばれている。群内の奉献塔山１号墳は、両袖式石室で、金銅製沓・金環・銅環・ガラス玉・銅釧等が出土した。同じく２号墳からは、ミニチュアの竈形土器がセットで出土した。

Ｆ支群は、鉢伏山の南西から北西にかけて築かれた古墳群で、通称「三ツ塚」と呼ばれる３基、切戸１・２号墳、横口式石槨の鉢伏山西峰古墳等が含まれる。切戸１号墳は、横穴式石室内に木棺２基が確認され、２号墳からはミニチュア土器が出土した。

Ｇ支群は、鉢伏山の南方の尾根上に存在する約７基の横穴式石室墳であるが、詳細は不明である。

４．古墳群の分析

① 飛鳥千塚古墳群は、支群ごとに墓域が設定され、個性がある。ほとんど６世紀後

半～７世紀初頭に築かれた後期群集墳である（Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ支群）。

② Ｂ支群は、基本的に４基の単独終末期古墳から構成される。

③ Ｃ支群は、終末期群集墳にあたり、無袖の横穴式石室と横口式石槨が併存する。築造された時期は、ほぼ同じ７世紀中頃で、横穴式石室は９号墳、横口式石槨は８号墳を契機として築かれた。構造的には２種類あるが、すべて単葬である。

④ 狭義の飛鳥千塚古墳群は、上郷に立地し、Ａ～Ｄ支群で構成され、Ａ支群のある低地は当時の集落立地と重なると考え、それらを囲むＢ・Ｃ・Ｄ支群は風水の思想に基づいた配置がされているのではないか。

⑤ 二上山北西の石英安山岩の露岩を利用し、凝灰岩も使用するなど、石工技術に秀でている。オウコ８号墳から出土したタガネは、被葬者の生前の職掌を表わしている可能性が高い。

⑥ Ｅ・Ｆ支群などの後期群集墳では、ミニチュア土器の出土が顕著で、渡来系氏族の被葬者を示唆している。

⑦ Ｆ支群の切戸１号墳における２棺は、釘や鋲の大きさや配置などから夫婦合葬の可能性がある。

⑧ 同支群内でも格差は明らかで、Ｂ支群における観音塚古墳、Ｃ支群におけるオウコ８号墳、Ｆ支群における鉢伏山西峰古墳が上位に位置する。

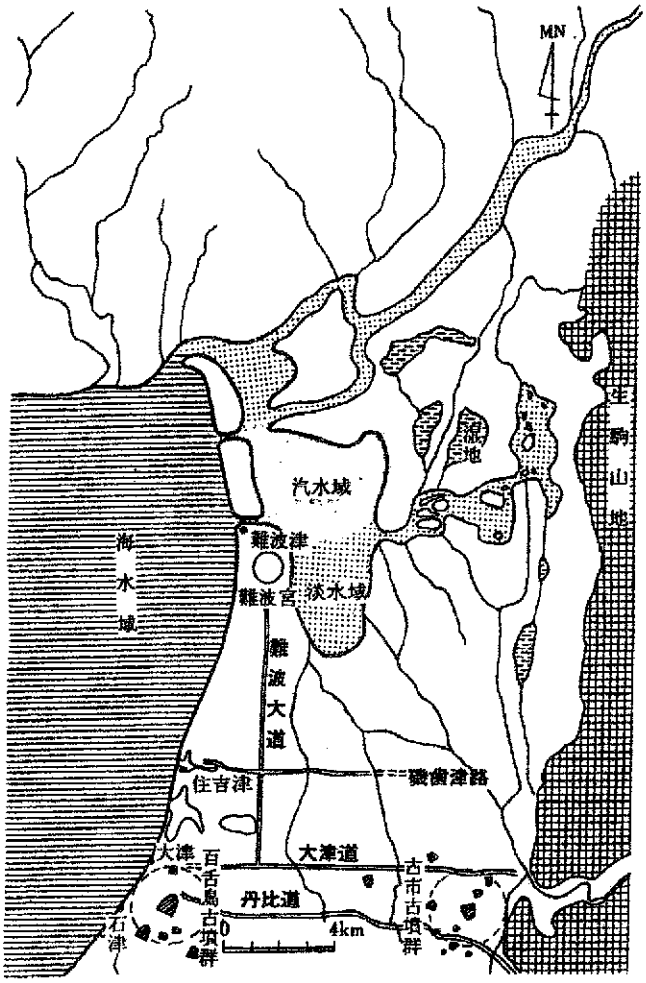
５．むすびにかえて

飛鳥千塚古墳群の中でも特に、羽曳野市飛鳥に所在するＡ～Ｄ支群は、安宿郡上郷に立地し、飛鳥戸神社の祭神である昆支王を始祖とする飛鳥戸造一族の墓域である。築造されたのは６・７世紀であるが、５００年頃の韓半島の情勢に連動した昆支王の来倭、倭国で生まれた２人の百済王の存在など、５世紀からの倭と百済の継続的な関係の上に成立した。

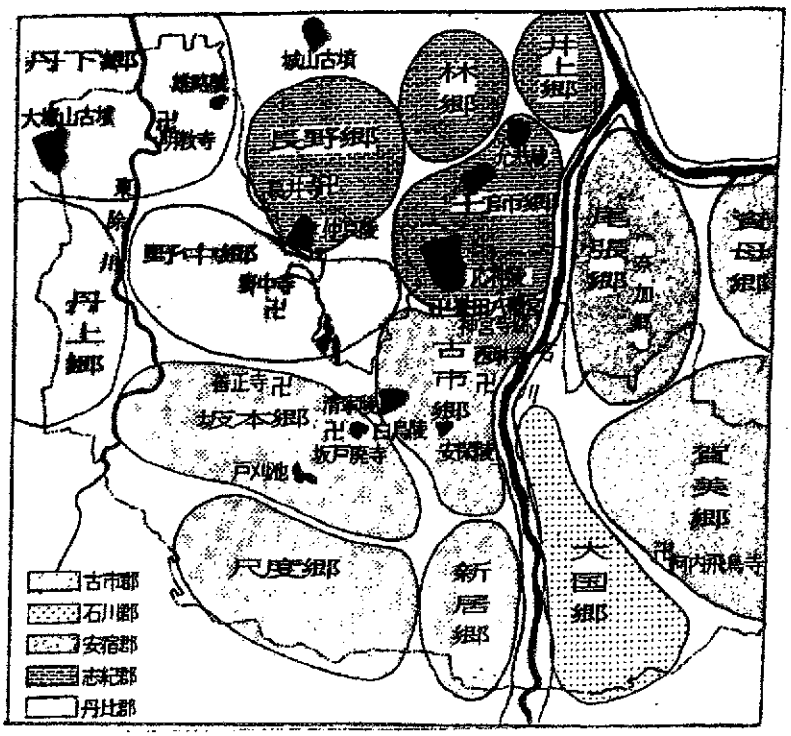
百済系氏族の倭国への渡来は、まず４世紀末頃の高句麗南進に伴う文氏などの渡来、次に５世紀後半の三国動乱による船・津・白猪・馬・蔵氏などの渡来、そして７世紀後半の百済滅亡による渡来の３回を確認することができる。当時の東アジア世界において、倭と百済はいつも同調した動きをしていた。漢字や仏教だけでなく、多くの文化や政治・思想・文物は百済を経由して倭国に将来された。

韓国西南部に集中して築かれた前方後円墳の被葬者については、倭人か韓人かが議論されている。昆支王の第２子である東城王は、４７９年に筑紫の軍５００人に守られて百済に帰国したとあり、これ以降積極的に百済復興を支援する。彼らのように百済の地に残り、百済の官人となった「倭人の百済官僚」が前方後円墳に葬られたと朴　天秀氏は考えている。つまり、百済と倭は、相互に官僚を含む人的交流をおこなう同盟国だったのである。

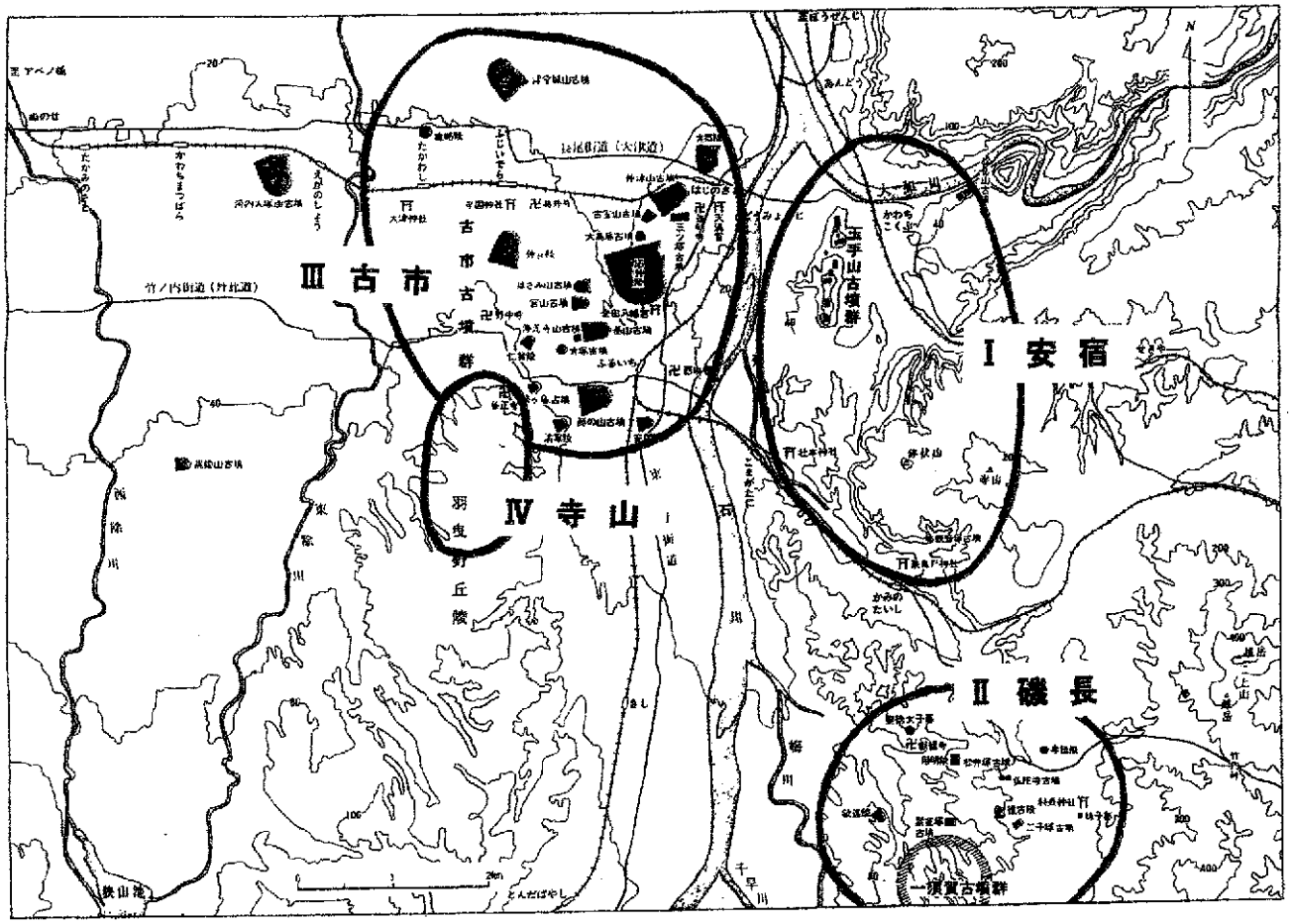
昆支王の末裔は、河内飛鳥に居住し、多くの子孫を残した。彼らの足跡をたどることによって、古代から現代に至る韓日関係が明らかになり、両国が未来志向で共生できる礎となるとともに、アジアの一員として役割を果たすことになる。



1．5世紀の大阪



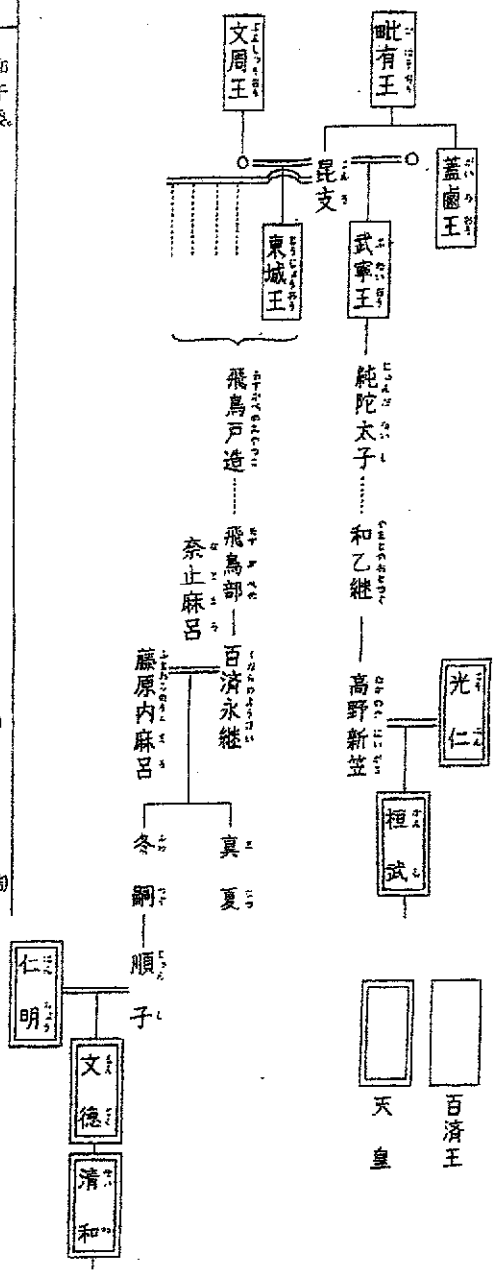
2．羽曳野市周辺の郡郷



3．河内飛鳥

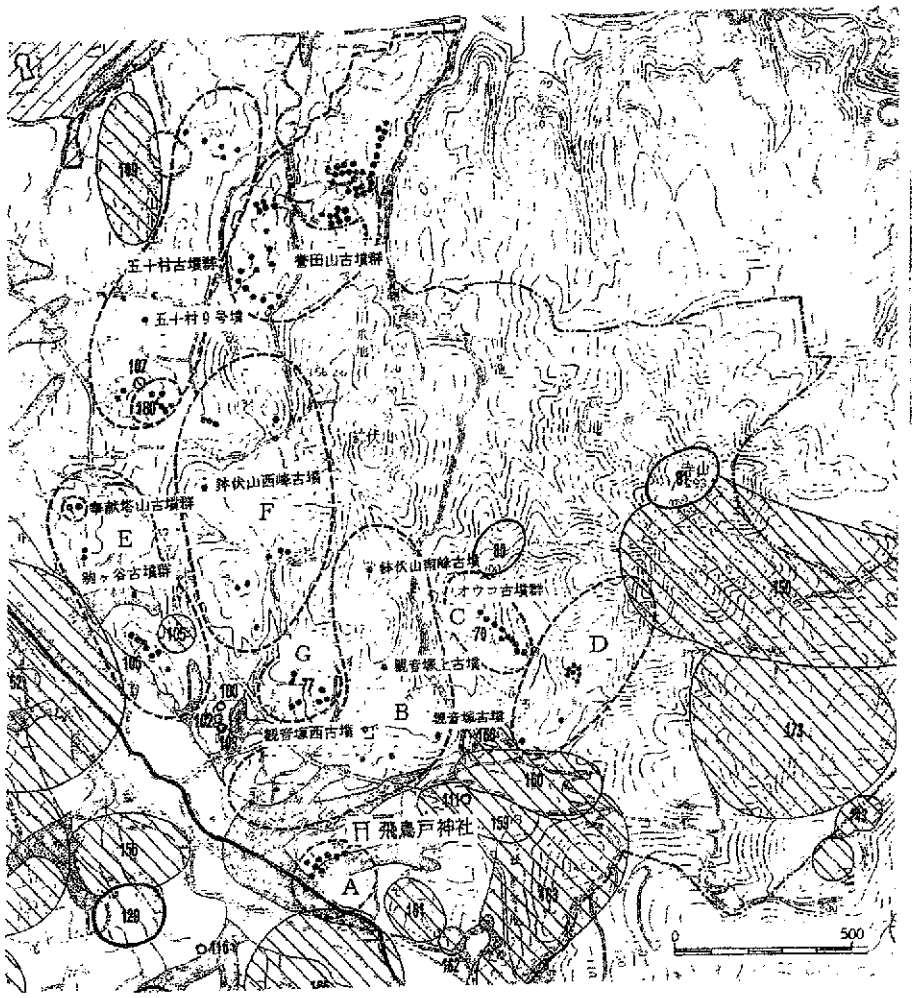
年代	津・船・葛井	飛鳥・安宿	田辺	西文
400-五世紀500-	辰孫王（「応神紀」） 大阿良王（「仁徳紀」） 亥陽君 牛定君（塩君） 麻呂君（宇志・牛）　智仁君（王辰爾）　味散君（味沙） 津　史（574）　船　史（553）　白猪史（569） （津の管理運営）　（船の貨物の税）　（戸籍調べ）	461（雄略5）昆支王来倭 兄（蓋鹵王）の婦人を同行。出産した子を百済に帰国させた。これが、島君（武寧王）で462年生まれ、501年から523年まで在位。	百済からの思須美・和徳（「仁徳紀」） 安宿郡尾張郷へ移る。 田辺史伯孫、馬の交換説話（「雄略紀」）	百済から王仁（和邇吉師）、論語・千字文を携えて来倭。 書　首（訳語）
	恵　尺 道　昭 668 船王後墓誌 684 船　連			559 文首阿志高・支弥高
600-七世紀700-	宝　然			668 行基（高志氏）生まれる。
	758 津　連　720 葛井連			707 文忌寸禅麻呂（墓誌） 738 馬　史
	中科宿禰（791）　津宿禰（791）　菅野朝臣（790）　宮原宿禰（791）　葛井宿禰（791）			765 武生連 791 宿　禰
800-九世紀	799「三氏の墓地は寺山」（「後紀」）	839 御春の宿禰を朝臣に、飛鳥戸氏の後也。 863 御春朝臣、百済国昆支より出づる也。		

4．南河内の渡来系氏族



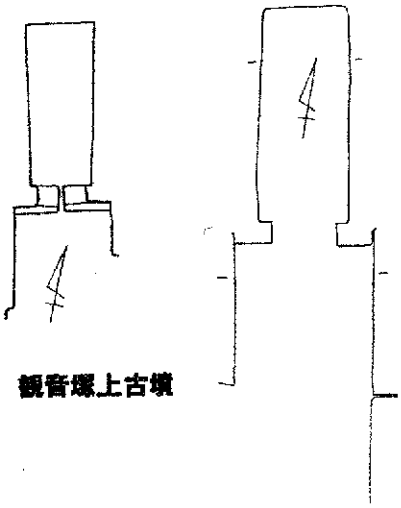
5．昆支王関係系図

| | | |



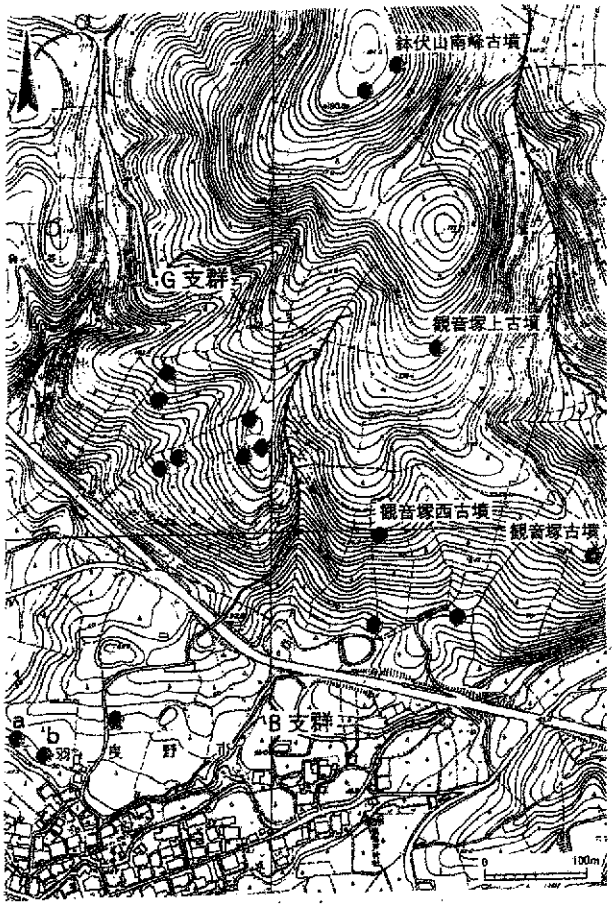
8．飛鳥千塚古墳群

9．飛鳥千塚A支群

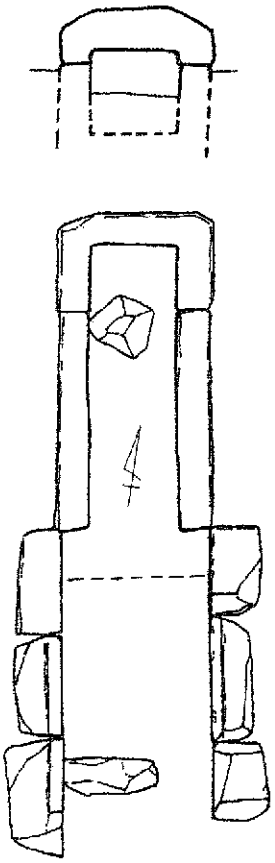


11．観音塚上古墳

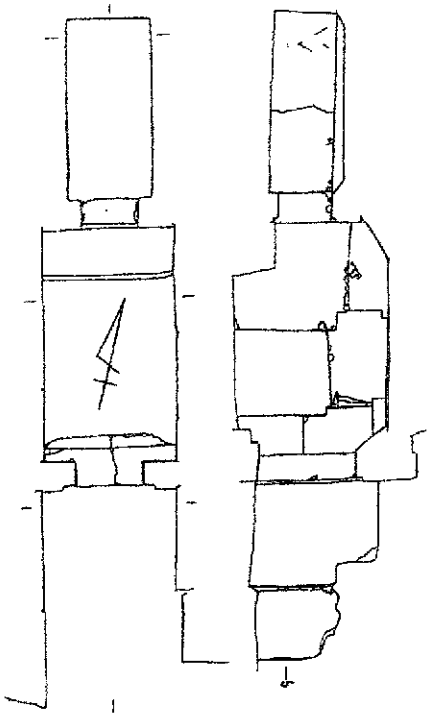
12．観音塚西古墳



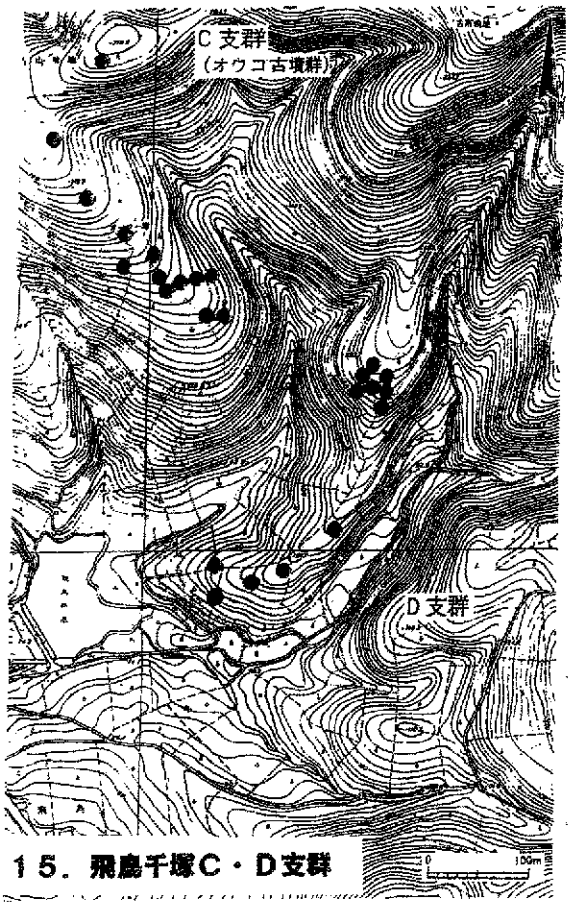
10．飛鳥千塚B・G支群



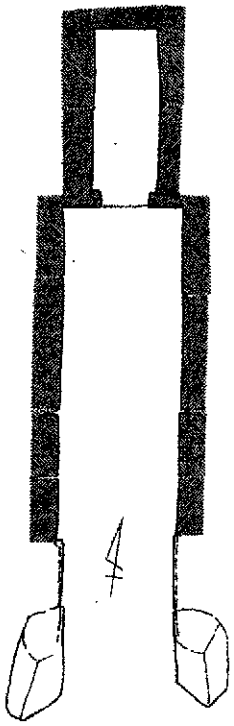
13．鉢伏山南峰古墳



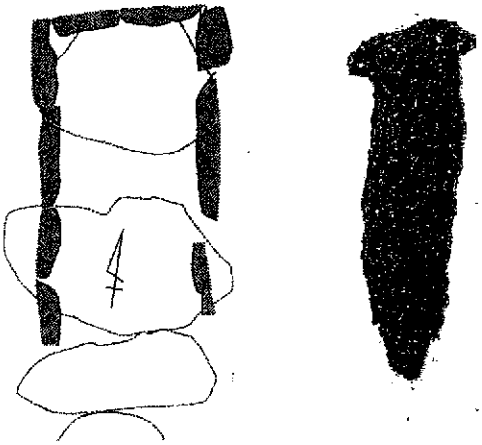
14．観音塚古墳



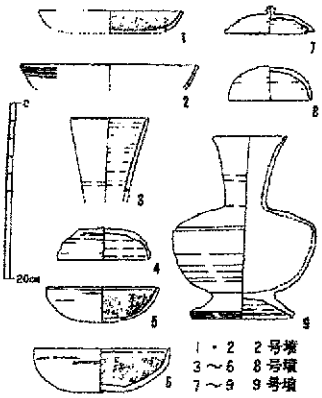
15．飛鳥千塚C・D支群



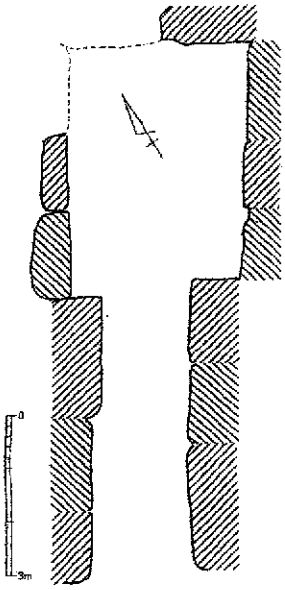
16．オウコ8号墳



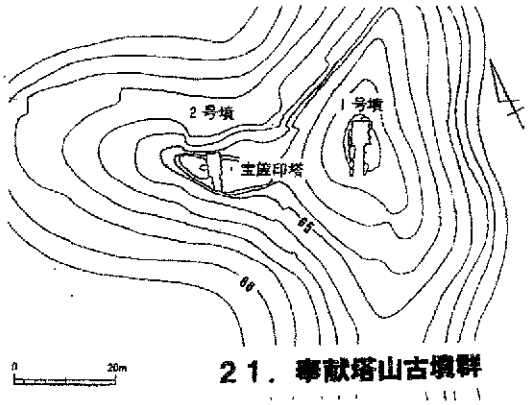
17．オウコ5号墳　18．タガネ（オウコ8号墳）



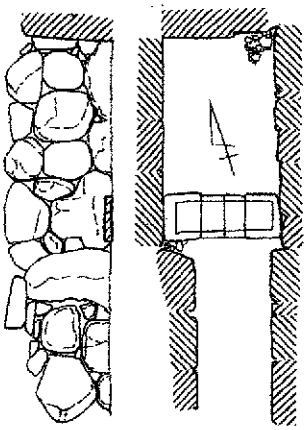
19．土器（オウコ古墳群）



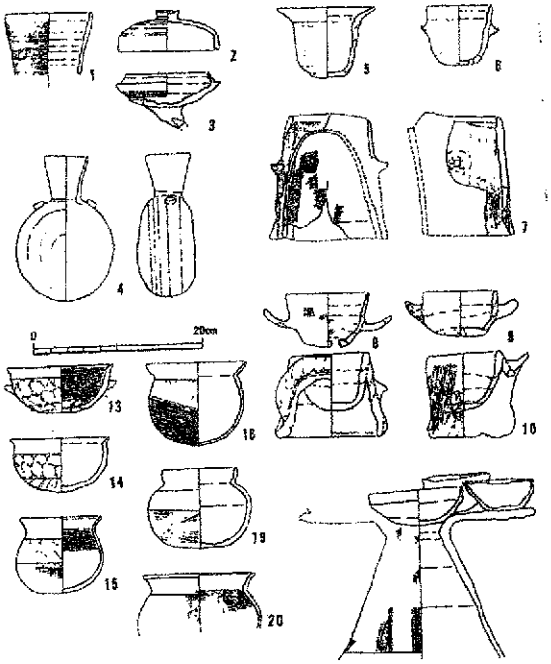
22．奉献塔山1号墳



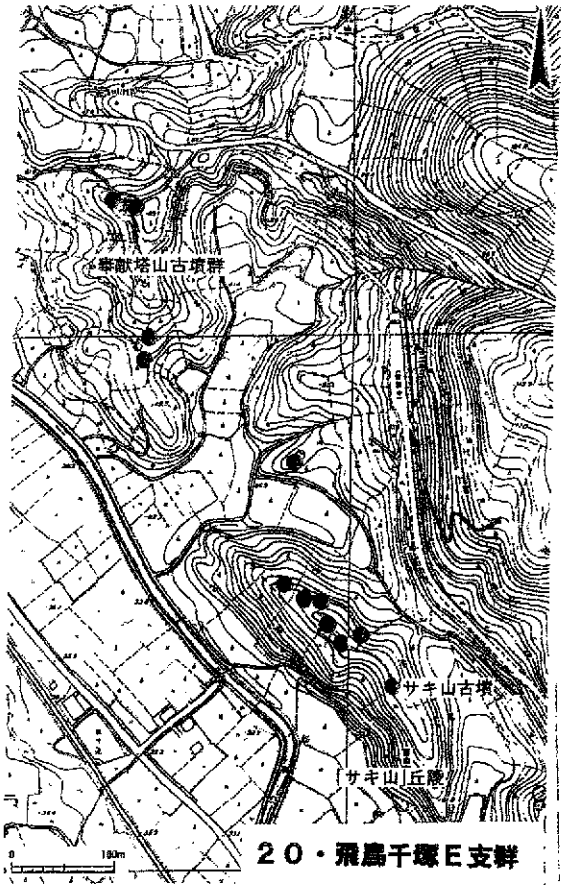
21．奉献塔山古墳群



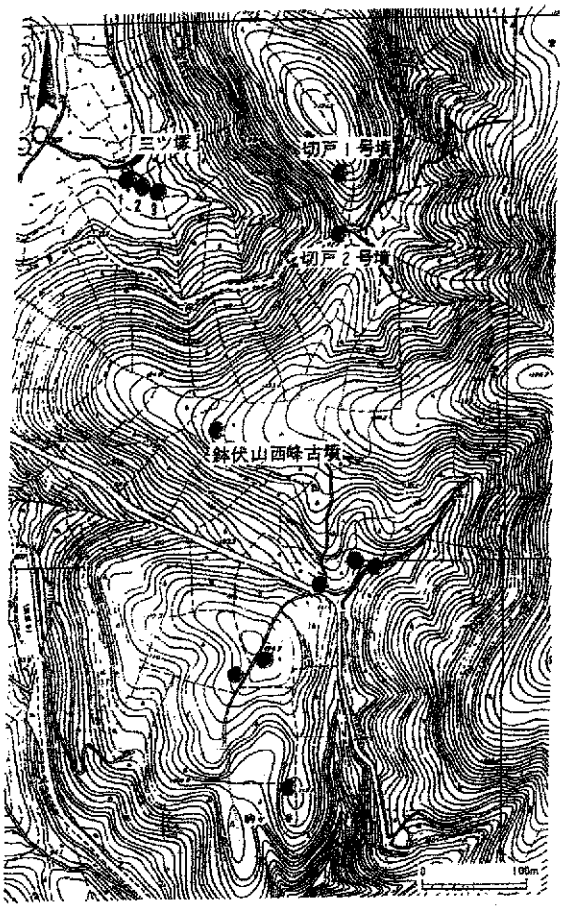
23．奉献塔山2号墳



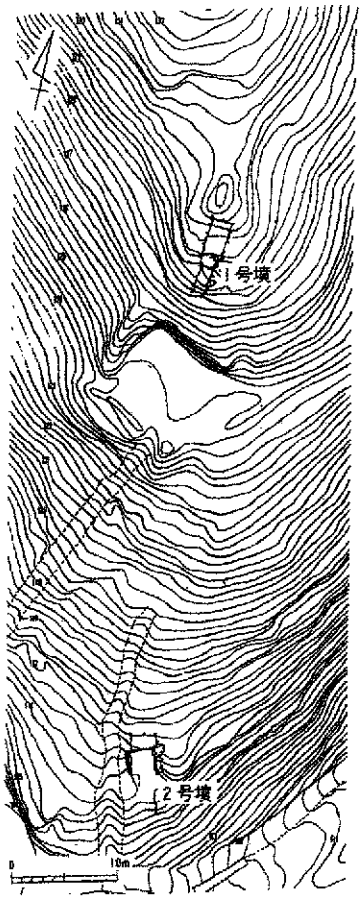
24．土器（奉献塔山2号墳）



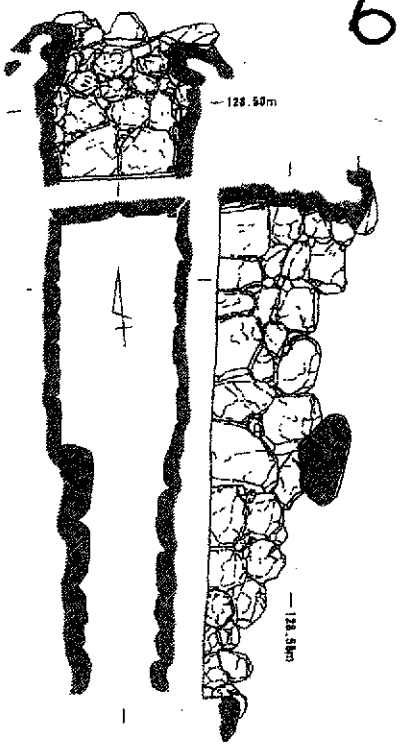
20・飛鳥千塚E支群



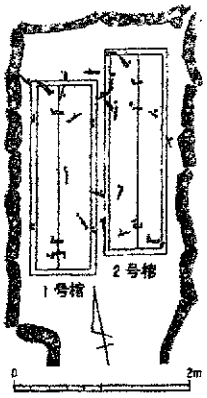
25．飛鳥千塚F支群



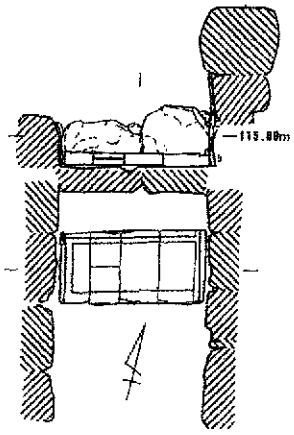
26．切戸1・2号墳



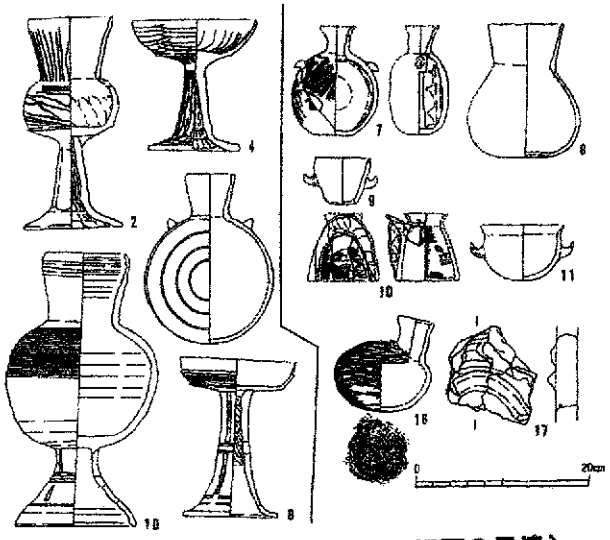
27．切戸1号墳



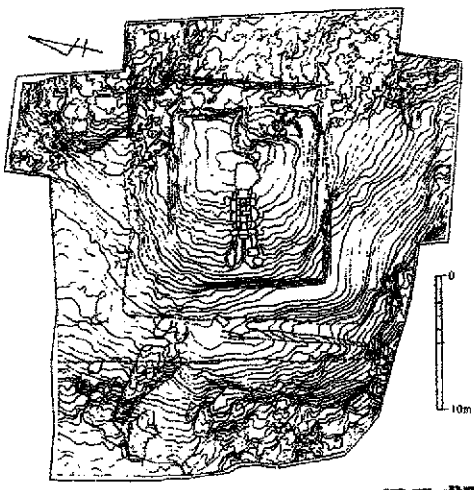
28．木棺の復原（切戸1号墳）

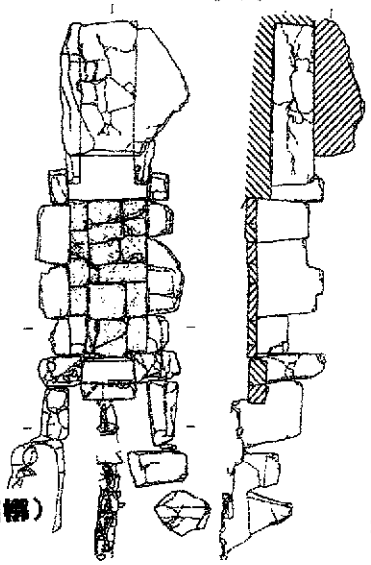


29．切戸2号墳

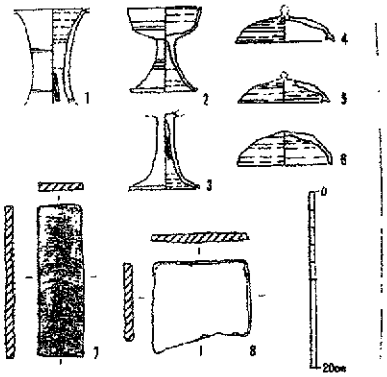


30．土器（左：切戸1号墳、右：切戸2号墳）



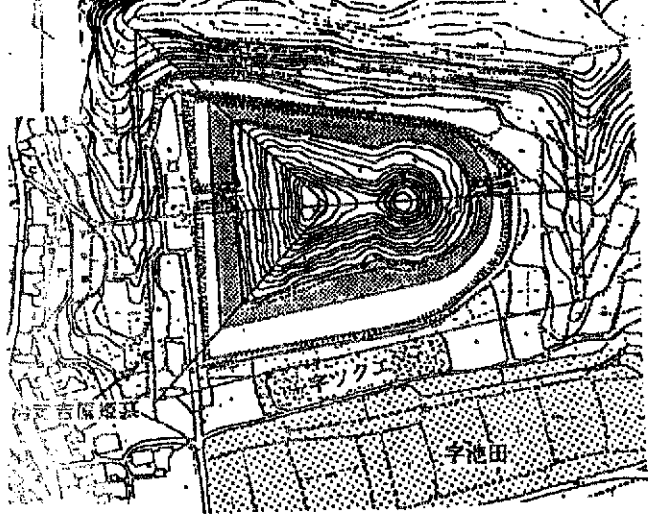


31．鉢伏山西峰古墳（左：墳丘、右：横口式石槨）

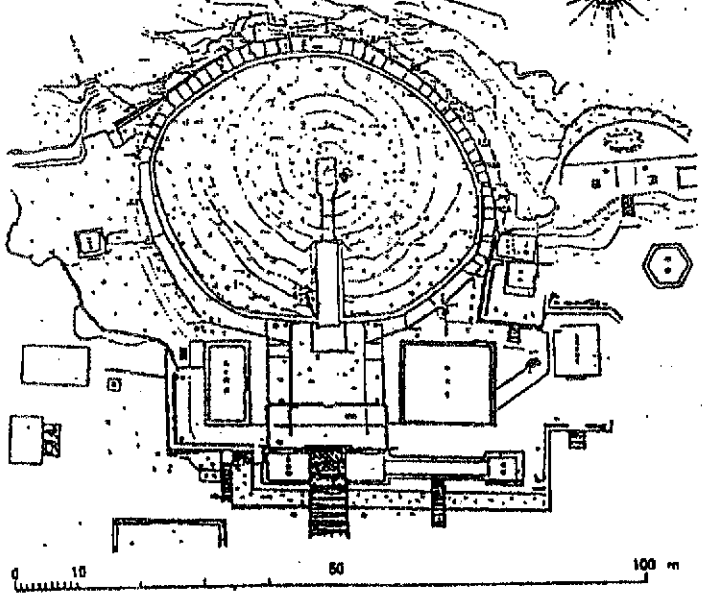


32．遺物（鉢伏山西峰古墳）

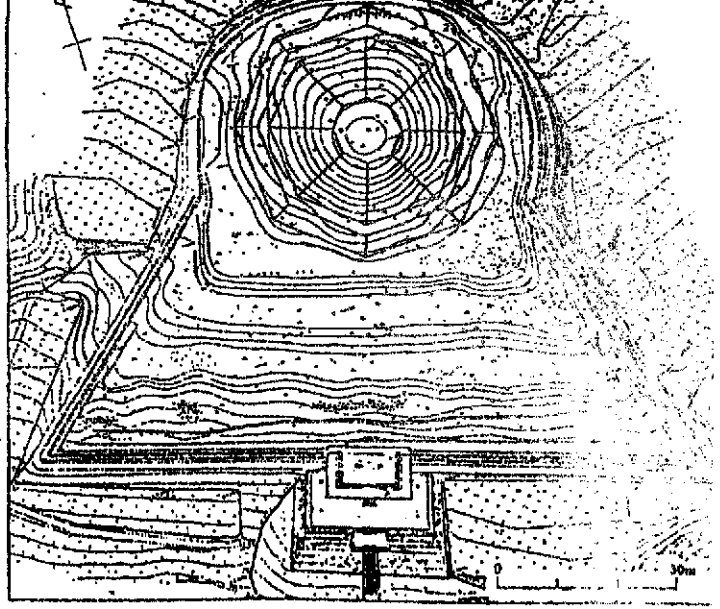
時代	世紀	四半世紀	私案	在位	メルクマーク	主なできごと	古墳 河内飛鳥	古墳 羽曳ヶ丘	古墳 磯長谷	古墳 大和飛鳥	寺院 軒丸瓦	寺院 代表的な寺	備考
古墳時代	6	3/4		~571 欽明			飛鳥 駒ケ谷 オ千塚						・多くの群集墳の終わり (高安、新沢、石光山)
				572~585 敏達		584 馬子、石川の宅に仏殿をつくる。(紀)							・前方後円墳一方墳へ (蘇我氏系)
		4/4		586~587 用明					須賀				・古墳時代の終わり一仏教の採用へ
				588~592 崇峻		591 敏達を皇后陵に合葬する。			敏達				・前方後円墳の廃止一身分秩序の再構成
					593 推古朝	593 用明を磯長に改葬する。							政治的変化
飛鳥時代	7	1/4	I	593~628 推古		603 来目皇子死す、冠位12階 604 十七条憲法 622 太子、没する。 626 馬子 〃		お墓石	用明 推古 太子	石舞台	素	飛鳥寺 四天王寺 法隆寺若草伽藍 西琳寺 新堂廃寺	須恵器 ・蓋と身の逆転 ・宝珠つまみの出現 ・ヘラミガキ+暗文 仏教金属器 ・法量の縮小
		2/4		629~641 舒明					松井塚 仏陀寺 二子塚		弁		
				642~644 皇極	645 大化	645 入鹿・蝦夷没する。 646 改新の詔 649 冠位19階 八省百官、石川麻呂							
		3/4	II	645~654 孝徳				小口山他	御猫山		単	山田寺 川原寺 野中寺	・八角墳 ・新様式の発生
				655~661 斉明(皇極)									
				662~670 天智		663 白村江ノ戦 668 崇福寺					弁		・天智以降の須恵器、土師器の互換性 ・器種分化と規格性 ・完全に群集墳が終わる
				671 弘文	672 壬申の乱								イデオロギーの変化
		4/4	III	672~686 天武		681 記・紀に着手 685 山田寺					複弁	法隆寺西院 薬師寺 葛井寺 善正寺	・墳墓における墳丘の消失 ・大王から天皇へ
				687~696 持統	694 藤原宮へ								律令制成立
			IV	697~707 文武		698 薬師寺完成					藤原宮		・暗文の定式化 完成の時期
					710 平城へ								
奈良時代	8	1/4		708~ 元明							平城宮		



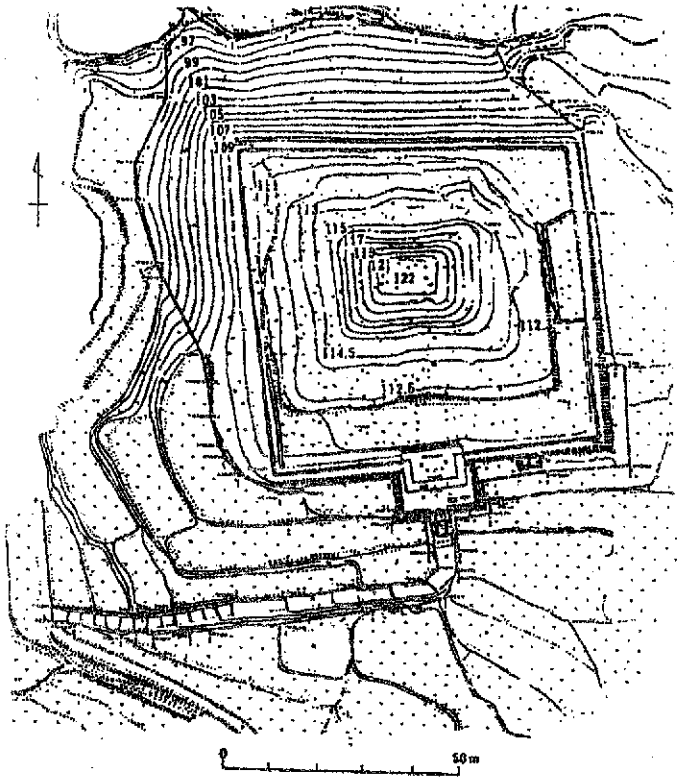
「斉明天皇陵」測量図（今尾文昭「古記録にみる飛鳥浄御原の都」1988より）



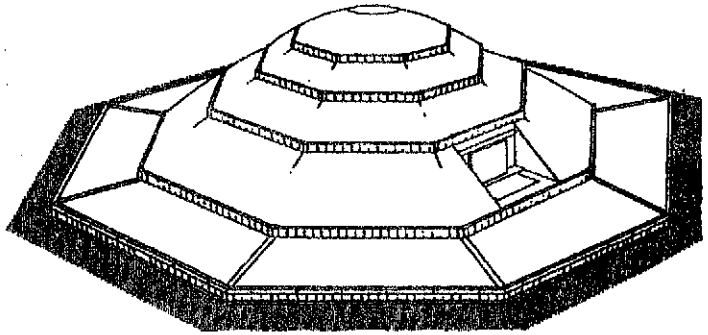
「聖徳太子墓」墳丘図（石室の位置は想像，「聖徳太子磯長墓考」より）



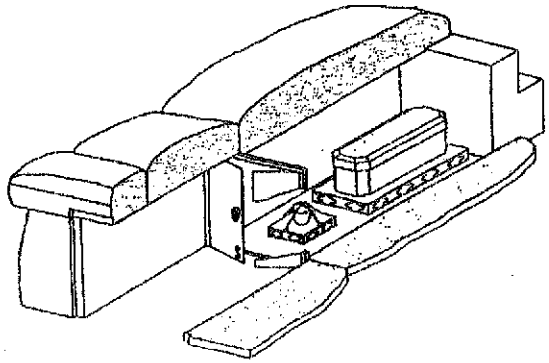
第77図　奈良県殷ノ塚古墳（現舒明陵）（宮内庁原図に太線部分等加筆）



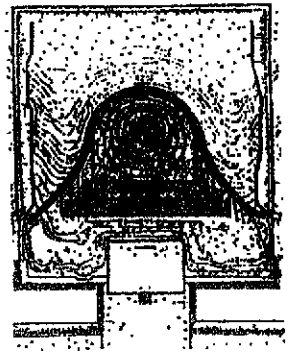
第71図　大阪府山田高塚古墳（現推古陵）



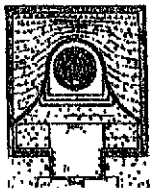
「天武・持統天皇陵」墳丘復元図（井上直夫『飛鳥の王陵』〈奈良国立文化財研究所飛鳥資料館，1982〉より）



「天武・持統天皇陵」墓室復元図（井上直夫『飛鳥の王陵』〈奈良国立文化財研究所飛鳥資料館，1982〉より）

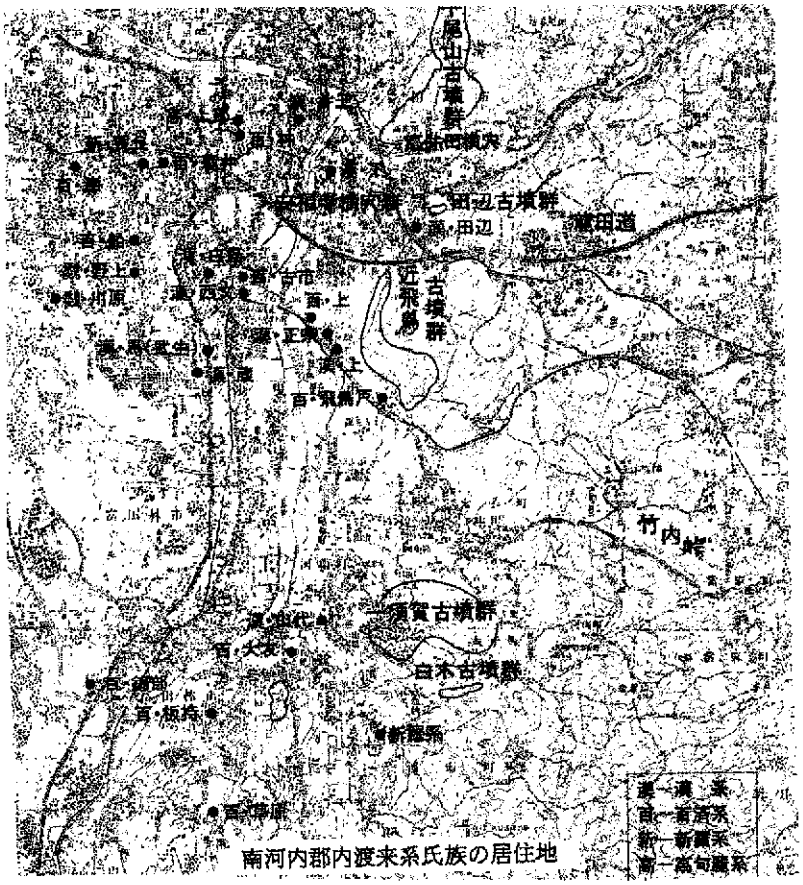


明治陵



大正陵

武蔵野陵（昭和天皇陵）（宮内庁提供）



南河内郡内渡来系氏族の居住地

一須賀古墳群の竈形代

一須賀古墳群の横穴

巨大な松井塚古墳の石棺

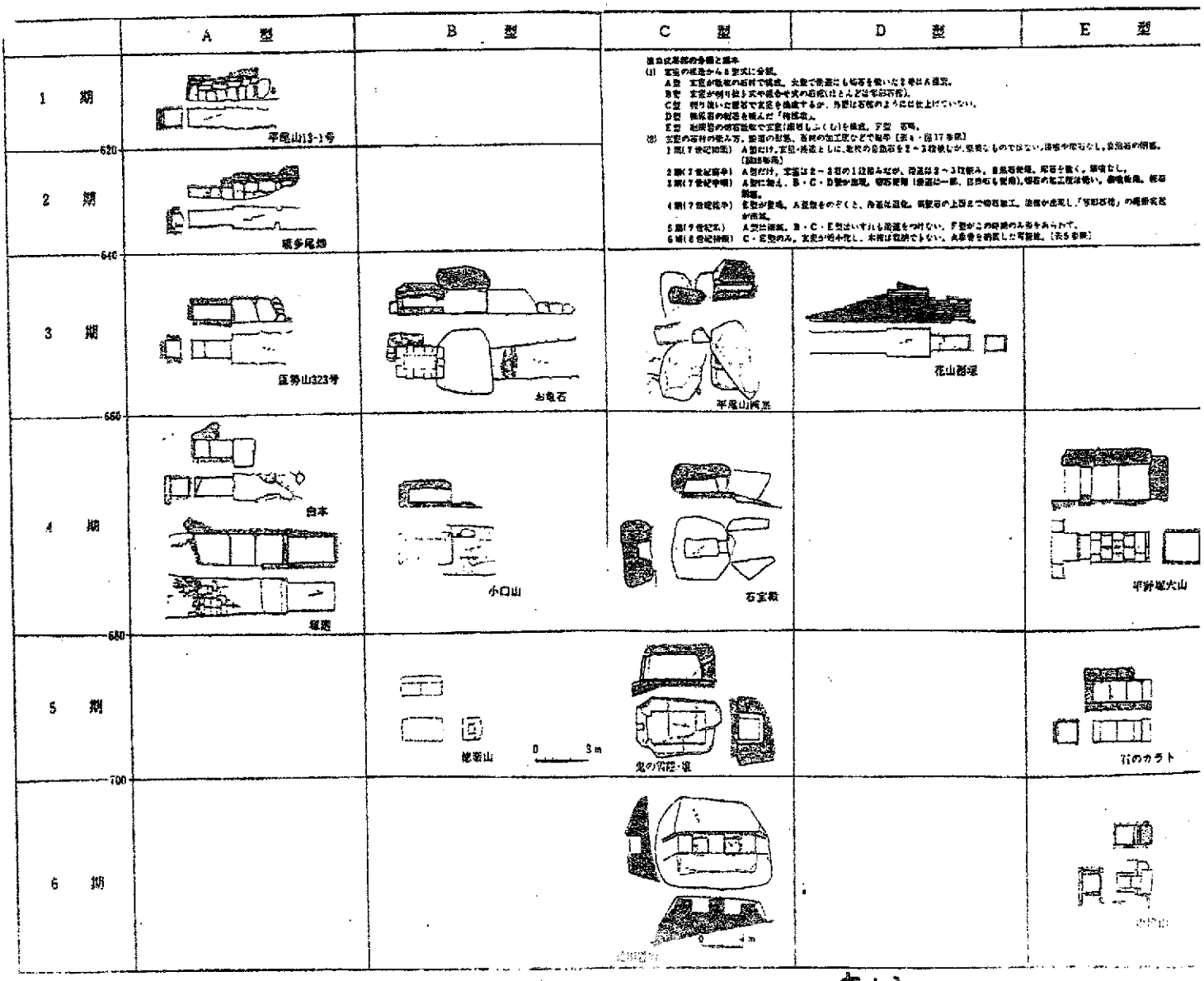


図15 横口式石槨の型式と編年(縮尺は各部のみ縮尺が異なる) (なセ)

図一例

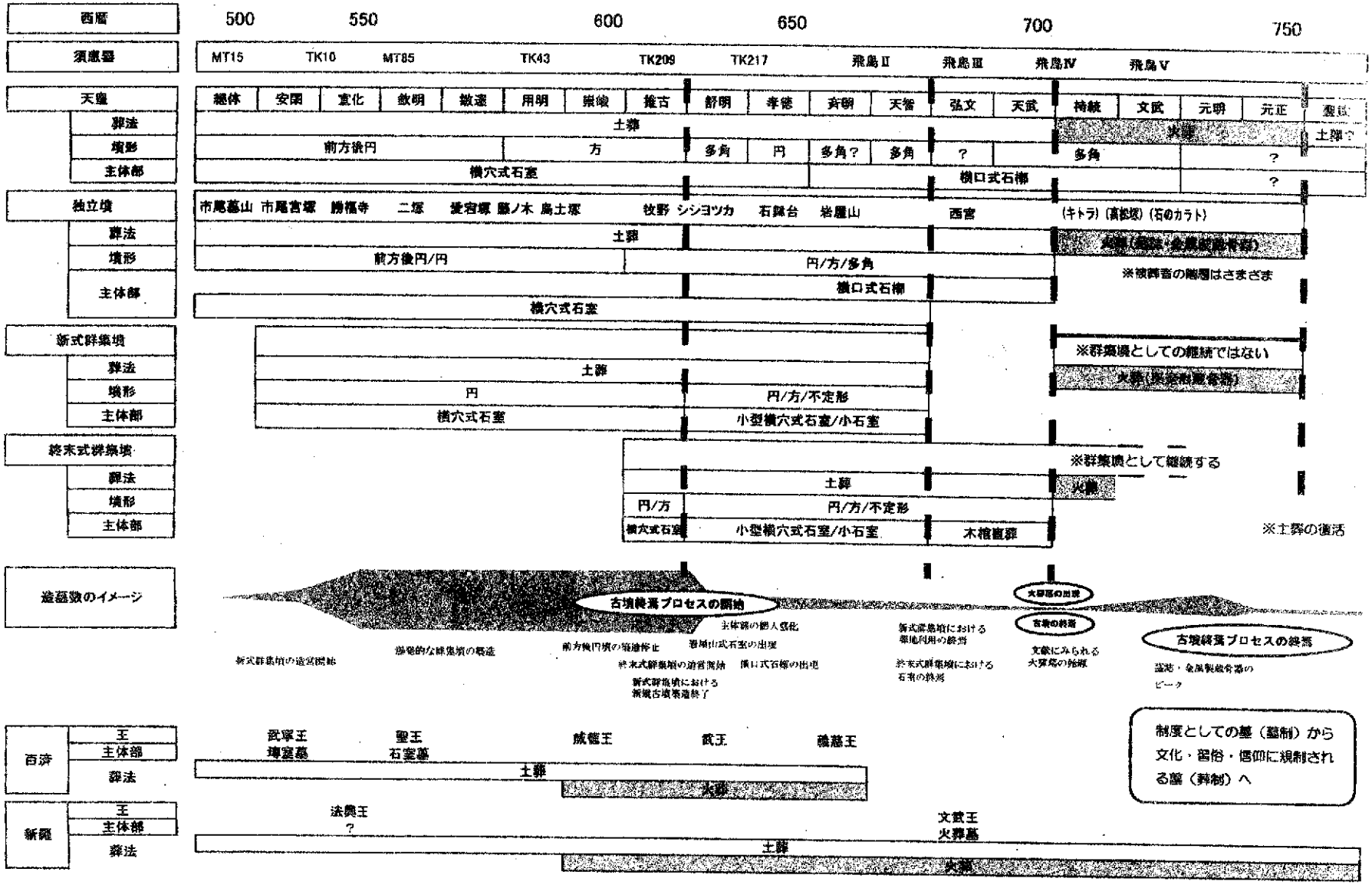


図11 古墳終焉過程概念図